

# 竹取物語の難題提示をめぐって

安藤重和

一

竹取物語に於いて「けり」で終止する文がどのように表れるかに関し、阪倉篤義氏は日本古典文学大系本「竹取物語」に依拠しつつ、次の如く、極めて重要な指摘をされている。

(略)「けり」で終止する文は、大体においてこの物語の前半に多く表れ、しかもそれは大体幾個所に集中的に用いられるという傾向を示している。そして、その場所というのは、即ち各章の末尾および発端の部分であって、その傾向は物語のはじめほど顕著に認められる。

このことを具体的に言うならば、まず二九頁一〜四行の、「けり」が集中的に用いられる部分は、竹取翁を紹介し、本光る竹のあつたことを語って、第一章の発端部をなし、三〇頁二〜四行の部分は、姫の美しさ、翁の致富のこと、かくや姫と名づけたことを語って、この章の結末部をなしている。次に、三〇頁10行から三一頁2行(ないし7行)

の、求婚者の多かつたこと、その多くは諦めた中でこの五人だけがなお求婚をつづけたことを語る部分は、第二章の発端部である。ところで、この章の結末部をなすべき文群は、一見、見当たらないように見える。そして、そのままに、話は第三章に入るように思われる。さて、いかにもこの第三章は、貴公子たちの苦心談として、以下の四・五・六・七章と、内容上は相並んで考えられるものである。ところが、以下の四章は、その冒頭文が、何れも「くらもちの皇子は」「右大臣あべのみむらじは」「大伴のみゆきの大納言は」「中納言いそのかみのまろたり(の)」「のごとくに、まずその章の主人公の名を持出すという形で始まるに對して、この章のみは、「猶この女見では」という、前につづく不安定な、異例の形で始まることになる。これは結局、この章が、例外的な短さを持ちながら、大秀の「解」以来、一章として立てられて来たけれども、この物語の文章構造より見れば、実は第二章につづけて見られるべきものであ

ことを示唆しているものと考えられる。(略)とにかくこうして、この第二章は、実は第三章と一つづきのものとして、三五頁4行目の、鉢を捨てて歌を詠んだことを語る文によつて、結末がつけられている。

「いかにもこの第三章は、貴公子たちの苦心談として、以下の四・五・六・七章と、内容上は相並んで考えられるものである」というのは、現在の竹取物語の完成形態を前提にした時の話でしかない。「以下の四章は、その冒頭文が、何れも『くらの皇子は』『右大臣あべのみむらじは』『大伴のみゆきの大納言は』『中納言いそのかみのまろたり(の)』のごとくに、まずその章の主人公の名を持出すという形で始まるに對して、この章のみは、『猶この女見では』という、前につづく不安定な、異例の形で始まる」のは、この章が「以下の四章」を自己と並列的に隨える予定など持たずに書かれていることを示している。「猶この女見では」といふ言いまわしは、文章内容の連続性からみて、阪倉篤義氏の言われる如く、「前につづく」ことを念頭に置いた語り口と思われる。つまり、第一章から第三章までは、ひとつのまとまりを形成しているのである。

また、山口仲美氏は、竹取物語の敬語使用状況について、三谷栄一氏・松本径子氏の御説を踏まえつつ詳細な調査を行われ、次のように指摘されている。

現存『竹取物語』は、内容的にみると、確かに、(一)章段の、かぐや姫の生いたちと貴公子たちの求婚で、まず序の

部分をなし、さらに(三)段の石作皇子から(七)段の石上中納言に至る五人の各求婚譚で一まとまりをなす。しかし、文章構造上からは、すでに、阪倉篤義氏によつて指摘されているように、(三)段の石作皇子の話は、(四)段以後の求婚譚とは切り離されて、(二)段の貴公子の求婚の部分と一つづきのものとしてとらえられるのである。(略)ところで、敬語表現のあり方は、まさに、文章の構造に呼応している。すなわち、(三)段は、(四)段以後とは切り離されて、(一)二段と同じく無敬語、(四)段以後が敬語付きとなるのである。

ここで山口仲美氏が言及される章段の区分は、阪倉篤義氏同様、日本古典文学大系本『竹取物語』のそれに依拠している。

(三)段は、(略) (一)二段と同じく無敬語 (つまり冒頭部から(三)段までは無敬語) と言っても、実は(二)段に例外が一例あることは、山口仲美氏も示されるところである。該当箇所を、次に示す。

この人々、ある時は竹取を呼び出(で)て「娘を吾にたべ」と、ふし拝み、手をすりのたまへど、「おのがなさぬ子なれば、心にも従はずなんある」と言ひて、月日すぐす。

地の文で五人の貴公子に対し「のたまふ」という尊敬表現が用いられている。だが、会話文では、竹取に対して五人の貴公子から「たぶ」という敬語が使われている反面、竹取から五人の貴公子への返事は丁寧語の「侍り」も使わず「心にも従はずなんある」と平常表現で済まされていることを思えば、ここで五

人の貴公子に対する語り手の尊敬意識が特に働いているとも考えにくい。(二)段で、五人の貴公子に対し無敬語表現が三十七例もあり敬語表現は今問題にしている一例に過ぎない(山口仲美氏御調査)ことを勘案すれば、「皇子たちや上達部たちにも、冒頭から『仏の石の鉢』までの部分で見れば、全く尊敬語は用いられていない。ただ一例の例外は本文伝写上の誤謬であろう<sup>③</sup>」とされる野口元大氏の御説に従って良いように思う。

## 二

さて、無敬語で語られる「冒頭から第三章まで」と敬語で語られる「第四章から末尾まで」の間に、敬語の使用に関して大きな断層が存在するわけだが、いま注目すべきは、無敬語で語られる「冒頭から第三章まで」の部分だけで、求婚難題譚がひととおり出来上がってしまったことである。

山口仲美氏は、

(一)段から(三)段までは、口承竹取説話の面影を、比較的忠実に伝えた。それは、「竹取物語」の(一)段と、今昔物語集の竹取説話の前半部とが、かなり良く似た叙述であることを思い合わせると、納得できよう。勿論、口承説話の無敬語状態もそのまま継承し、(三)段まで、一つづきに書かれた。いふなれば、無敬語は、口承竹取説話の痕跡なのである。

と指摘されている。鋭い御見解で、従いたく思う。

「冒頭から第三章まで」の部分で構成される求婚難題譚の内容を検討する。先ず、「猶この女見では」という第三章冒頭部を、この物語の文章構造に従って第二章に続けて読んで見たい。とりわけ熱心に求婚を続けた五人の貴公子達は、かぐや姫から難題の品を具体的に伝えられて次のように反応する。

御二達、上達部聞きて、「おいらかに、あたりよりだにな歩きそとやはのたまはぬ」と言ひて、うんじて皆帰りぬ。

猶、この女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺にある物もて来ぬ物かはと思ひめぐらして、石つくりの皇子は、心のしたくある人にて、「天竺に二(つ)となき鉢を、百千萬里の程行きたりとも、いかでかとるべき」と思ひて、かぐや姫のものには「今日なん天竺へ石の鉢とりにかまると聞かせて

「うんじて皆帰」つた時点で「皆」の求婚活動はストップする。では、「猶、この女見では、世にあるまじき心地のしければ」とある主語はだれか。一旦は「うんじて」「帰」ってしまった「皆」であると考える他なからう。では、「天竺にある物もて来ぬ物かはと思ひめぐらし」たのは誰か。そのように「思ひめぐらし」たのは「猶、この女見では、世にあるまじき心地のしければ」という理由に拠るのだから、この主語も「皆」でなくてはならない。つまり、「石つくりの皇子」だけが「天竺にある物もて来ぬ物かはと思ひめぐらし」たのではないらしい。「皆」が何故「思ひめぐらし」たのかと言えば、「皆」に難題と

して示されたのが「天竺にある物」であったからであろう。つまり各求婚者にそれぞれ異なった難題を示す現在の様な形ではなく、古くは、求婚者皆に共通の難題「天竺にある物」を課して居たらしいのだ。

文脈上、「皆」が関わっているのはここまでである。この後は「石つくりの皇子」だけの話に特化する。「石つくりの皇子は」の「は」という係助詞に注意すれば、「石つくりの皇子は」の意味は、「皆」の中で「石つくりの皇子は」の意、であると知られよう。これ以下は「石つくりの皇子」の行動に絞って語られ、第三章までの無敬語部分に他の求婚者が顔を出す事はない。

田中大秀は、『竹取翁物語解』で、「猶、この女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺にある物ももて来ぬ物かとは思ひめぐらして」の部分を取り上げ、

此一條は、五人の凡（スベ）ての意にて、下五段の冒頭（ハジメニカブセラレタル）なり。されば、たとひ天竺にある物なりとも、と云り。

と註している。「下五段の冒頭」というのは以下に展開される「仏の御石の鉢」段から「燕の小安貝」段までの五話全体の冒頭をなすという意味であり、現在の竹取物語全体の内容に即した解釈ではあると言えよう。しかし、今、文章構造に即して読む限り、「下五段の冒頭」とは解し得ない。何故なら、第二章と第三章の合体枠の内部にこの部分が置かれているからであ

る。この部分は、同じ枠内で語られる「仏の御石の鉢」段にのみ影響を及ぼしてその役割を終るのである。大秀は「天竺にある物も」の部分で「たとひ天竺にある物なりとも」と解している。しかし、原文には「たとひ」の語は無い。「下五段の冒頭」と解する限り、「下五段」には「天竺」関係以外の難題が種々登場するので「たとひ天竺にある物なりとも」と「天竺」を例示的に扱うことになろうが、この部分が文章構造上唯一影響を与える「仏の御石の鉢」段では、文字通り「天竺」が問題になり、かぐや姫のもとに「今日なん天竺へ石の鉢とりまかる」と聞かせている。本来「天竺」にあるはずの「仏の御石の鉢」の話に終止するのである。「天竺にある物も」とは、「（事実として）天竺にある物であっても」の意であろう。

### 三

「かたちけ（うら）なる事世になく」成長したかぐや姫に血道を上げた他の多くの男どもがあきらめた後も、「なほ言」ひ寄り続けた五人の貴公子は、「色好みといはるるかぎり五人」、「世の中に多かる人をだに、すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする人ども」とされているので、「軽薄な女狂い」のイメージを持たれてしまうかも知れない。だが、実際描写されているところを見ると、極めて真剣に行動している。「かぐや姫を見まほしうて物（も）食はず思ひつつ、かの家に行きて

たたずみありく」が、これを「かひあるべくもあらず」と判断するや、恋文作戦に切り替える。だが、「文を書きてやれど、返事せず。わび歌など書きておこすれども、かひなし」という結果である。かぐや姫は恋の言葉など一顧だにしないのだ。恋文作戦を「かひなしと思」つた貴公子達が取つた行動に注意しよう。

霜月しはすの降り凍り、みな月の照りはたたくにも障らず  
来たり。

ここには、所謂「身を知る雨」の論理が関わっていることに気が付かねばならない。

かずかずにおもひおもはずとひがたみ身をしるあめはふり  
ぞまされる（古今集 705番）。

男の愛情の度合は口では問いがたいと考える女性は、雨が降っている時、その雨をものともせず男が自分を訪ねて呉れるか否かで、自分が男に如何ほど愛されているかを判断する。恋の言葉を書き送つても無視するかぐや姫は、「ことは」というものを信用していない。その姫に対し、「霜月しはすの降り凍り、みな月の照りはたたくにも」それを物ともせず訪れる行動を見せることで愛情の強さをアピールしている。それでも効果のない貴公子達は竹取に「娘を吾にたべ」と懇願するが駄目。苦しみの余り、この恋を断念しようと「祈りをし、願を立」てても「思（ひ）やむべくも」なかつた彼らは「あながちに心ざし見えありく」つまり行動を通しての愛情アピールを「あながちに」

エスカレートさせて、かぐや姫達に見せつけたのである。

「これを見つけて」、今まで「おのがなさぬ子なれば、心にも従はずなんある」と事態を静観してきた竹取が、「この人々の年月をへてかうのみいましつつのたまふこと」を、思ひ定めて、一人一人にあひたてまつり給ひね」と姫に結婚を強く迫っている。「年月をへてかうのみいましつつのたまふこと」とは「年月を経て愛情をアピールする行動の裏打ちを持つ言葉」の意である。それは、単なる言葉とは異なり、それでもって男の愛情の程を判定するに足るものであると竹取は思うのである。姫は貴公子達が彼女を「かたちよし」と聞いて言い寄つて来ている原点を「よくもあらぬかたちを」と否定して、「世のかしこき人なりとも深き心ざしを知らではあひがたし」と主張するが、竹取の「かばかり心ざしおろかならぬ人々にこそあめれ」との反論に「なにはかりの深きをか見んと言はむ。いささかの事也」と言つて「深き心ざしを知らではあひがたし」という主張をトーンダウンさせる。貴公子達の「深き心ざし」など彼らの行動等からすでに明らかで、「かばかり心ざしおろかならぬ人々」という竹取の判断に反論できないのだ。この点を忘れてはならない。難題は求婚者の「心ざし」の深さを測るために提示されるわけではないのだ。

人の心ざし等しかん也。いかでか、中に劣り優りは知らむ。  
五人の中に、ゆかしき物を見せ給へらんに、御心ざしまさりたりとて仕うまつらんと、そのおはすらん人々に申し給

へ。

これが難題を持ち出す理由である。結婚する為には「人の心ざし等し」の中で「御心ざしまさりたり」と誰かを判定する必要があると言ふのだ。勿論、結婚相手を一人に絞り込むためである。「五人」を「二人」に絞り込む為こそ必要とされる難題である。

だが、「ゆかしき物を見せ」ることが何故「御心ざしまさりたり」という判断に繋がるのか。姫は、姫に「ゆかしき物」を見せる為に努力する男の行動を通して男の「御心ざし」を見極めるのだ。つまり、「身を知る雨」の論理であり、貴公子達が自らの愛情の程を姫に伝えるべく男性の側から駆使してきた手法でもあった。この判定法を姫から聞いた竹取も、竹取からそれを伝え聞いた貴公子達も、即座に「よき事なり」と賛成するのである。姫は難題の品が欲しかったわけではなかった。男の「行動」こそが欲しかった。だから、「見せ給へらん」と、「見せる」と言う動詞を用いたのである。

#### 四

「人の心ざし」の判定法に就き翁や貴公子達の賛成を得た姫は、「ゆかしき物」を具体的に示す。

かくや姫、石つくりの皇子には、「佛の御石の鉢といふ物あり。それをとりてたまへ」と言ふ。くらしもちの皇子には、

「東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝おりて給はらん」と言ふ。今ひとりには、「唐土にある火鼠のかはぎぬを給へ」、大伴の大納言には、「龍の頭に五色に光る玉あり、それをとりて給へ」、いそのかみの中納言には、「燕のもたる子安のかひひとつとりて給へ」と言ふ。(略)翁「とまれかくまれ申さむ」とて、出(で)て、「かくなむ。聞ゆるやうに見せ給へ」と言へば、御心達、上達部聞きて(略)

姫の言葉の文末に注意しよう。「たまへ」「給はらん」「給へ」「給へ」「給へ」とある。要するに、姫は「難題の品を(見せる)だけではなく、与えよ」と要求している。これでは言っていたことと違うことになる。

野口元大氏は、この点に關し、

(「見せ給へらむに」の)「給へらむに」は、「給ふ」の命令形に助動詞「り」の未然形、それに仮想の助動詞「む」の連体形のついたもの。「り」は状態の存続を示すから、私のほしいものを目前に見せて、それが継続的であるようにして下さる(つまり「賜ふ」を婉曲にいう)ような人があったら、そのお方に、の意。

と述べて居られるが、疑問である。「り」は状態の存続を示す、と言つても、それは助動詞「む」によって仮想された時点に於ける存続であり、その時点を越えた将来に渡る永久的存続を意

味しているとは思われない。また、いくら継続的に目前に見せ続けたとしても「賜ふ」の意にはなり得ない。所有権は移転しないからである。

「見せる」と「たまふ」は同じ意味にはなり得ないのだが、この直後で、翁は貴公子達に向かって「聞ゆるやうに見せ給へ」と言っている。「見せ給へ」ならば、姫の言っていたことと一致する。また、「聞ゆるやうに」という翁の言葉に注意すれば、姫はここで「見せ給へ」と言っていたはずで、そうでなければ、辻褃が合わないのである。この直後に語られる「佛の御石の鉢」の段を見ると、「佛の御石の鉢の偽物を」作り花の枝につけて、かぐや姫の家にも来て見せれば、かぐや姫あやしがりて見るに、鉢の中に文あり」とあり、「見せる」「見る」の観点で語られている。

つまり、貴公子達への難題の品々を姫が個々具体的に翁に明かす場面は、本来の形が改変されてしまっているのだ。□承竹取説話のままではあり得ない。

## 五

では、□承竹取説話本来の形とはどのようなものであろうか。私は、

各求婚者にそれぞれ異なった難題を示す現在の様な形ではなく、古くは、求婚者皆に共通の難題「天竺にある物」を

課して居たらしいのだ。

と前述した。それが、本来の形であろう。本来の形は第三章冒頭の語り口の中に実に断片的に痕跡をとどめていたのである。「天竺にある物(佛の御石の鉢)」は「天竺に二(つ)となき鉢」とも表現されているように、この世に唯一の品である。それを姫に「見せる」人は唯一人に限られ人数は引き絞られて直ちに結婚相手となる。難題は結婚相手を一人特定するために設定されたものであることを思うと、「天竺に二(つ)となき鉢」は最適である。現在の竹取物語に見られる他の難題の品四種のいずれも、入手困難ではあるものの、この世にただ一つしかない品とはされていない。この世にただ一つしかない品であることが積極的に表明されているのは「天竺にある物(佛の御石の鉢)」だけなのだ。

## 六

なお、求婚者の数については、難題提示部分で、五人の求婚者がいるのに三人目の求婚者を「今ひとり」と呼んでいる、文脈上不整合なその呼び方から、古くは求婚者三人であったであろうと想像されることは既に繰り返し指摘されるところである。ならば、□承竹取説話に於いて「天竺にある物ももて来ぬ物かは」と難題解決に挑戦した人物は三人で、話は三話が語られていたはずである。無敬語の話は何故「石つくりの皇子」の

話一つなのか。恐らく、「石つくりの皇子」の話以外の二話は不出来で「くらしの皇子」「あべの右大臣」の話に書き換えられてしまったのではないかと思われるふしがある。くらしの皇子が難題を持参した条りを見よう。

御子のたまはく、「命をすてて、かの玉の杖持ちてきたる、とて、かぐや姫に見せてまつり給へ」と言へば、翁持ちて入りたり。(略) (姫が) これをあはれとも見てをるに、翁走り入りて

「見せる」「見る」の観点で語られている。あべの右大臣の場合はどうか。

(火鼠の皮衣を) 家の門にもていたりて立てり。竹取出(で)きて、とり入れてかぐや姫に見す。かぐや姫の、皮衣を見ていはく、「うるはしき皮なめり。別きてまことの皮ならむとも知らず」。竹取答へていはく「(略) 世中に見えぬ皮衣のさまなれば、これをと思ひ給(ひ)ね。(略)」と言ひて、呼びすあててまつれり。

こちらにも、「見せる」「見る」の観点で語られている。

ところが、大伴の大納言の話といそのかみの中納言の話には、この観点が全く見られない。それどころか、大伴の大納言は難題解決に失敗した後、「かぐや姫てう大盗人の奴が、人を殺さんとするなりけり」と罵っている。「見せてくれ」と言っただけで「盗人」扱いされることはあり得まい。ここは明らかに「龍の頭に五色に光る玉あり、それをとりて給へ」と姫が所有

権を請求した、改変された方の難題を受けている。いそのかみの中納言の話では、難題の「燕の子安貝」は「人だに見れば失せぬ」とされ「目で見ずに手探りで入手するしかないもの」と扱われ、「見せる」「見る」の世界とは別世界である。

このように、敬語で語られる四話の中で、前二話のみが、「見せる・見る」の観点での語りがなされ、無敬語語りの石つくりの皇子の話に共通している。それは、口承竹取説話の段階で求婚譚三話が「見せる・見る」の観点で語られていた痕跡ではないかと思われるのである。ただし、口承竹取説話の段階での求婚譚三話は全て「天竺にある物(佛の御石の鉢)」を共通の難題としていたはずである。

#### 註

(1) 阪倉篤義氏校注 日本古典文学大系『竹取物語』(岩波書店 昭和三十二年十月)「解説」参照。以下、阪倉篤義氏の御説はこれによる。

(2) 山口仲美氏「竹取物語の文体と成立過程」(『紀要 共立女子短期大学文科』第二十二号 昭和五十四年二月) 参照。以下、山口仲美氏の御説はこれによる。

(3) 三谷栄一氏「竹取物語の原型―『語』という変体漢文であったか―」(『解釈と鑑賞』二十三卷二号 昭和三十三年二月)

(4) 松本径子氏「竹取物語に於ける敬語について」(解釈 二  
卷一号 昭和三十一年一月)

(5) 野口元大氏校注「新潮日本古典集成『竹取物語』」(新潮社  
昭和五十四年五月) 百二十二頁

(6) 註(5) 書 十六頁

なお、竹取物語は日本古典文学大系本を、竹取翁物語解は竹  
取物語古註釈大成本を、古今集は新編国歌大観本を、それぞれ  
用いた。また、拙文中の傍線は、全て筆者が付した。